

上河内村文化財調査報告書第2冊

梨木平遺跡

—第二次栃木県河内郡上河内村梨木平遺跡調査概報—



遺跡を東方より望む（矢印）

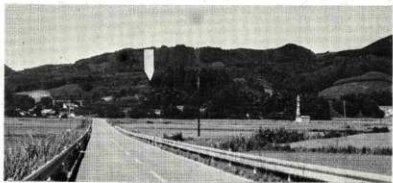
昭和48年3月

上河内村教育委員会刊

上河内村文化財調査報告書第2冊

梨木平遺跡

—第二次栃木県河内郡上河内村梨木平遺跡調査概報—



遺跡を東方より望む（矢印）

昭和48年3月

上河内村教育委員会刊

序 文

昨年の梨木平第1次発掘では、43個の袋状土壘とおびただしい土器、石器類が出土し、成功裡に終了することができた。

本年度の第2次発掘では、38個の土壘が発掘され、合計81個となり、一遺跡からの発見としては県下最高の数といわれている。梨木平の考古学的価値は、この点だけでも県下有数のものといえよう。さらに硬玉製大珠1個が出土したことは、その原産地をめぐる、新たな問題を提供したもののようである。

第2次発掘の主眼を住居跡の発見において調査を進めたが、なかなか発見できず、なかばあきらめかけていた時、発掘期間の終期になって、土壘群よりかなり離れた場所から、ついに住居跡が姿をあらわした。しかし、まことに遺憾なことに時間切れとなってしまったので、関係者協議の上、来年度も継続事業として、第3次調査を行なうことに一決し、大切に埋めもどしをした。

村教委としては、第3次の事業費として予算を倍加し、大規模に発掘し、住居跡を精密に調査するとともに、土壘群と住居跡の関係について解明したいと思っている。

発掘にあたっては、常川秀夫、埴静夫両先生のご努力に対し、衷心より感謝申し上げたい。さらに、宇大考古学研究会員の組織的継続的なご協力を戴き、作業が順調に進捗した点につき、これまた厚くお礼申し上げる。

その他、県考古学会、村文化財調査委員会、高松婦人会、地主各位など昨年に引続き、絶大なご協力についても、あわせて感謝申し上げたい。

終りに、来年度の第3次発掘は、輝かしい成果が予約されているので、関係各位の一層のご協力をお願いする次第である。

昭和48年3月30日

上河内村教育委員会

教育長 猪瀬正男

目 次

序 文	教育長 猪瀬 正男
例 言	
1. はじめに	1
2. 調査の経過	1
3. 遺 構	
(1) 袋状土壌	4
(2) 住 居 跡	9
(3) その他の遺構	10
4. 遺 物	10
(1) 石 器 類	10
(2) 土 器 類	12
(3) その他の遺物	15
5. 総 括	16
(1) 袋状土壌と住居跡について	16
(2) 縄文中期土器について	17
(3) 硬玉製大珠について	18

例 言

1. 本書は梨木平遺跡の第2次調査概報である。調査は昭和47年8月21日より9月4日までの都合15日間実施した。
2. 調査主体は上河内村教育委員会（猪瀬正男教育長）であり、国庫補助によって調査を行なった。
3. 発掘調査関係者の名簿は巻末に列挙したが、このほか多数の方々が参加、協力下さった。謝意を表したい。
4. 本書は次の者が分担執筆したが、堀、常川がこれを補筆し編集した。
堀 静夫、常川秀夫、斎藤一男、石山光雄、島田 豊、互井哲夫、田中善太郎
5. 執筆に至るまでの整理と作図、写真撮影などは、宇大考古学研究会の諸君があたったが、細部については斎藤一男が調整した。
6. 第3次調査後、本報告書を作成するため、本書はその概要にとどめた。

1. はじめに

梨木平遺跡は、河内郡上河内村高松地内にある縄文時代中期の遺跡であり、該時期の集落跡を研究する上に極めて重要なところである。

本遺跡は第1次調査概報に記したように、農林省5か年計画による西鬼怒パイロット事業に伴い土取り作業が行なわれ、事前調査後は破壊撤減する予定であった。ところが、昭和46年夏の第1次調査によって縄文時代中期に盛行する袋状土壌群が発見され、その数は43基に達した。この土壌は第1次調査地点の周辺にも延びている可能性が十分推測されたので、土取り作業は中止され、今回の第2次調査の実現となった。

この間、村教委は県教委と連絡をとりながら、梨木平遺跡の保護と調査のため東奔西走された。とくに県教委文化課係長大和久雲平氏（現、県史編纂室副主任）はじめ同指導主事竹沢謙氏、常川らは文化庁との予算折衝に当たられ、第2次調査実現の運びとなった。この点に私は敬意を表したい。また公務ご多忙中、発掘現場を視察されて種々指示下さった村長手塚裕司氏、村議会議員、村文化財調査委員の方々に対し、あわせて謝意を表したい。

また村教委は第2次調査後、前向きな姿勢で第3次調査を計画されていることを知った。私はこの施策に非常な感激をうけた。というのは、梨木平遺跡のもつ学問上の重要性を認知され、大変なご尽力をなされていることを知ったからである。それだけに私どもは責任の重大さを痛感し、全力を尽し学問的成果をあげねばならないと肝に銘じている次第である。だが本遺跡は県内屈指の大遺跡であるから、調査方法を改め効率ある発掘によって、住居跡と土壌群との相互関係を把握したいと考えている。第2次調査によって住居跡の一部を確認したことは、集落跡の研究に一つの光明を与えた。

集落跡の研究は、考古学の分野においてはかなり重要な役割を占めている。これについては多言を要しない。集落跡に関する学問上の諸問題を解決する糸口を梨木平遺跡がもっていることは事実であるので、私どもは第3次調査によって種々の問題を解決したいと念じ、以下第2次調査概報を記してみたい。（稿）

2. 調査の経過

第1次調査は、昭和46年7月26日より8月11日まで実施し、今回の第2次調査は昭和47年8月21日より9月4日まで行なった。その経過概要を記してみよう。

8月21日（月）：AM9.00現地集合。雨模様のため発掘準備だけにとどめる。PM1.00鎌入れ式。続いて作業を開始する。第1次調査地区の直ぐ東側に3×17.5mの南北トレンチ2本を設定する。これをT_I、T_{II}とし、北半を夫々T_I-1、T_{II}-1、南半をT_I-2、T_{II}-2とする。層位

は腐植土(25~30cm), 今市軽石層(50cm), ローム層と続く。T_Iにおいて今市軽石層上面で10数個の土壌を確認する。T_{II}は表土はぎに終る。

8月22日(火):発掘現場に集合したが雨天のため調査困難。AM11.00中止する。

8月23日(水):T_Iの直ぐ西側に南北3×7mの拡張部を設け、同時にT_{II}の東側にT_{III}を設け調査を進める。T_{II}において土壌数個を確認する。PM, T_{IV}, T_VをT_{III}の東側に東西方向に設ける。T_{IV}の東区で大きな土壌を確認する。平板測量を開始する。本日から北里大学池田了君が特別参加する。

8月24日(木):AM, T_I-2区東側に3×6mの拡張部を設ける。T_{II}とT_{III}間のセクションをとる。PM, 今市軽石層上面の平板測量終了。この上面で多数の土壌があることを知る。この中、P₄, P₅, P₆, P₁₀を調査。この結果、P₆の底部辺に加増利E₁式土器2個体出土。1個は把手があるが他の1個は口縁部がないものである。P₄の底部(ローム)に5~6個の自然石があり。P₅の充填土中に石、土器片(加増利E₁式)が含まれている。P₁₀の調査は終る。中村紀男、大金宣亮、川原由典の諸氏ら来訪。

8月25日(金):前日と同様AM8.30作業開始。P₆の調査を進め、底部に小ビットがあることを知る。P₁₁, P₁₂, P₁₃の発掘を始める。P₁₂は二つの土壌が切り合っているためP₁₂-1, P₁₂-2として整理する。P₁₃の充填土中から大きな土器片出土する。P₁₃にはP₁₄が切り合っていることを知る。P₄, P₅のセクション図を作成する。PM, P₆のセクションベルトを除去し、付属の小ビット3個あることを確かめる。P₈, P₁₀の調査開始。P₈に小ビット3個確認。先にP₁₁を設けたが、これはP₈と同一であるためP₁₁を図面上から消す。P₂, P₃を調査する。P₈は遺物皆無。P₅内から石皿出土し、炭化物が比較的多い。

手塚村長、猪瀬教育長ら現場視察に来訪。本日から中山由美子さん参加する。

8月26日(土):朝から雨のため作業を中止する。

8月27日(日):T_{IV}の調査を開始する。P₂₀, P₂₁, P₂₂, P₂₄, P₂₅の位置を確認する。P₁は極めて浅いものである。P₁₆内から口頸部のない土器が出土する。P₅は深さ90cmで底部となり、そこに付属の小ビット3個検出された。そのうち1つは袋状を呈している。石皿が出土した。P₄は完掘したが付属小ビットはない。PM, P₁₇, P₁₈, P₁₉, P₂₃, P₂₄, P₂₆, P₂₇, P₂₈, P₂₉の調査を開始し、P₁₈, P₂₁, P₂₂, P₂₅は完掘する。またこの4つのビットは袋状を呈さないものである。P₂₃からは多量の遺物出土する。P₁₃の底部からは加増利E₁式土器片出土。P₂₄の充填土中から石皿が発見される。休日のため宇大生10名応援に来る。

8月28日(月):AM, 昨日に続き土壌を掘る。P₃₀, P₃₁, P₃₂の表土下に大形の加増利E₁式土器片出土。P₂₄の充填土中から硬玉製大珠が発見される。P₁₆, P₁₇の底部辺には黒色土に炭化物、砂粒が混入していた。P₁₆, P₂₃のセクション図を作る。PM, P₁₀のセクション図, P₅

の平面図をとる。P₆内の土器を掘りあげる。P₁₇には付属の小ピットがある。また彩色された土器片が出土する。

宇大生5名応援に来る。村教委の小林力氏が本日から現地に来ることになった。

8月29日(火)：P₂₄の範囲を知るため東側の農道にトレンチ(T_{VI})を設ける。この結果、縄文土器片とともに須恵器破片が発見される。かなり攪乱されているようである。P₁₆とP₁₀、P₁₇とP₂₃が夫々切り合っていることを知る。P₁₈のセクション図作成後、セクションベルトを除去する。はじめP₃₄としたものはP₁₈と同一であることを知る。P₂の南側に新しいピットが確認されたので、これをP₃₄とする。P₁₂の東にP₃₃が確認される。P₁₉の充填土中から炭化物塊(直径4~5cm)が発見される。P₅の平面図をとる。PM、P₁₃底部から小ピット発見。中から5~6個の石出土する。P₁₃の西側に新たなピットを確認したので、これをP₁₄-1とし、従来のP₁₄はP₁₄-2とする。P₃の東壁にある小ピットから磨製石斧出土する。P₁₉の底部充填土はP₁₆、P₁₇と同様に黒色土に炭化物・砂粒が混入していた。P₃₀、P₁₄、P₂₈、P₃₂のセクション図を作成する。宇大生5名の応援がある。

8月30日(水)：AM、P₂とP₃との間にP₃₇を確認する。P₂、P₁₇から夫々小ピットを検出する。P₉を完掘したが明確な土層ではない。新たにP₃₅を発見する。P₁₅を完掘したが遺物は皆無であった。P₁₉の北側にピットを認めたのでこれをP₁₉-2とし、従来のものをP₁₉-1とする。PM、P₃に2個の小ピットを確認する。P₃₄はP₃₀-1と切り合っていることがわかった。P₃₀-1の底部は砂質土層であった。P₂とP₁₇とは付属墳によって連なっていることが確認された。本日から全体測量を開始する。

猪瀬教育長、泉文化課竹沢氏ら来訪。

8月31日(木)：P₁₉内に小ピットを確かめ、P₁₇の付属小ピット内底部は砂粒混入のロームである。P₃₂の西半部は昨年掘った土層であるため放棄する。P₁₇の小ピットから磨製石斧出土する。今まで掘った地点の南方に新たなトレンチを設定し、これをB地区とし、従来の地区をA地区とした。PM、P₁₄の北壁から凹石3個出土する。P₁₉、P₁₆、P₁₇、P₃₀を完掘し、P₁₄、P₁₇、P₂₃の平面図をとる。B地区を掘り始める。層位は腐植土(耕作土)、今市軽石土となるが、A地区よりは耕作土層が深い。表土剥ぎ中、打製石斧、蔽石出土する。

猪瀬教育長、長嶋元重氏ら来訪。宇大生3名の応援がある。

9月1日(金)：AM、B地区からP₄₁、P₄₂、P₄₃、P₄₄、P₄₅の土層が発見される。また最初P₄₀としたところは土師期の住居跡であることが判明したが、時間の都合でこれを放棄した。P₄₁、P₄₃からはかなり多量の縄文土器片が出土する。またB地区の南方にC地区を設け、グリット方式によって発掘を進める。つまりG₁、G₂、G₃、G₄、G₅として掘る。PM、G₃に落ちこみのあることを確かめる。A地区はほぼ全掘される。宇大生3名の応援がある。

9月2日(土)：B地区のP₄₁、P₄₂、P₄₃、P₄₄を完掘する。P₄₁は袋状を呈さない。PM、C地区のG₉が大きく落ちこんでいるため、拡張して調査範囲をひろげる。またG₉では住居跡の床部と思われるところに土器の埋込みを発見する。また付近にはかなり多量の土器片があった。住居跡の可能性が高い。

9月3日(日)：C地区を掘り続ける。この拡張部から炉跡様の組石が発見される。ただ焼土は認められない。この拡張部からは多量の土器片とともに石鏝、打製石斧、礫石などが出土する。全体測量が終了、B地区は復元作業をする。またC地区は2～3基の住居跡が重複しているようである。

猪瀬教育長、県教委の橋本、川原、二宮、山崎の諸氏来訪。宇大生7名の応援があり、発掘作業はほぼ終了する。

9月4日(月)：A地区の土器を掘りあげる。袋状土壌群の全体撮影を行なう。同時にB地区の埋めもどしを行なう。C地区については第3次調査に期待し、完掘することなく埋めもどし、PM 2.00作業のすべてが終了し発掘現場をあとにする。(常川・瓦井)

3. 遺 構

(i) 袋状土壌

第1次調査の際は袋状土壌が43個発見されたが、今回の第2次調査では38個発掘された。従って総数81個になる。この数は県内で発見された一遺跡における土壌数としては最も多い。今後さらに調査が続行されれば、その数は倍加されるであろう。だがかなりの大遺跡であるため、全面調査は現段階では不可能であるから、土壌群の配置など不明点が多い。第2次調査で発見された土壌を次に表示してみよう。

土 壙 号	口 径 CM	底 径 CM	深 さ CM	特 記 事 項
1	94×94	72×80	20	石皿1ヶ、礫7ヶ底面にあり。袋状を呈さない。
2	175×133	246×202	90	典型的な袋状土壌。底部に小ビットあり。
3	170×165	230×205	95	底面の東壁と南壁に小ビットあり。
4	123×120	146×140	77	充填土硬い。礫10数個混入。
5	161×128	225×178	90	底面から礫石出土。東・北・南の壁近くに小ビットあり。
6	279×237	244×203	30	袋状を呈さないが、もとは呈していたようだ。横転した土器2ヶ出土。
8	270×220	240×210	30	形状が不規則な土壌である。小ビット5ヶあり。

土 壙 番 号	口 径 cm	底 径 cm	深 さ cm	特 記 事 項
10	202×138	140×70	33	底面北隅に小ビットあり。
11	110×95	95×82	—	P ₈ と切り合う。調査中にP ₁₁ はP ₈ と同じものになる。
12	—	215×200	112	4ヶの土壙と切り合っている。調査中口部崩れ不明。
13	235×160	202×145	80	P ₁₂ , P ₃₀ と切り合う。底面近くに礫10数ヶあり。
14	105×86	225×221	85	P ₁₃ , P ₃₀ -1と切り合う。土製耳飾出土。
15	140×102	124×90	26	浅い土壙で楕円形プランを呈する。
16	135×135	205×195	95	P ₁₉ -1, P ₁₉ -2, P ₃₉ と切り合う。
17	170×150	220×215	90	P ₂₃ と切り合う。底面付近に炭化物多い。蔽石、凹石などあり。
18	185×150	163×130	50	北隅に小ビットあり。構築時には袋状を呈していたらしい。
19-1	—	—	76	P ₁₈ , P ₁₉ -2, P ₃₉ と切り合う。底面より礫10数ヶ出土。
19-2	—	—	130	P ₁₈ , P ₁₉ -1と切り合う。底面北隅に口径42、深さ25の小ビットあり。
20-1	—	—	70	口径220、底径100cmと思われる。北側でP ₂₉ -2と切り合う。
20-2	—	—	45	口径200×100、底径100×50cmと思われる。袋状を呈さない。
21	170×150	140×120	12	袋状を呈さない浅い土壙である。
22	110×70	70×60	30	口部は楕円形を呈する。
23	140×120	165×145	60	P ₁₇ と切り合う。底面より石皿、礫などが出土。小ビットあり。
24	200	140	43	硬玉製大珠が出土。P ₂₄ は数個の土壙と重複している。
26	—	—	60	P ₂₃ と底面北東隅で切り合うようである。
27	—	—	43	未完掘。袋状を呈するかも知れない。
30-1	133×102	180×140	72	礫が10数ヶ出土。P ₁₄ , P ₃₁ , P ₃₂ などと切り合う。
30-2	—	—	45	いくつかの土壙と切り合っているため口径、底径など不明。
31	140×135	150×140	42	P ₃₀ -1と切り合う。底面に小ビット2ヶあり。河原石数ヶ出土。
32	280×230	300×250	95	不整形であるが大きな土壙である。東側に2個の袋状土壙あり。
34	170×155	200×200	80	P ₃₀ -2と切り合う。底面南壁に小ビットあり。

土 壙 号	口 径 cm	底 径 cm	深 さ cm	特 記 事 項
35	—	—	70	未完掘。このビットはもう一つのビットと切り合っているようだ。
36	90×50	85×40	45	不整形の小さい土壙である。礫4個あり。
37	110×100	105×95	54	もとは袋状を呈していたらしい。
38	160×120	150×100	18	楕円形を呈する浅い土壙である。
39	170×150	215×200	87	P ₁₈ , P ₁₉ -1と切り合う。底面に土器片多い。小ビットあり。
41	200×140	160×110	65	袋状を呈さない土壙である。
42	155×150	155×150	48	もとは袋状を呈した土壙であった。小ビットあり。
43	150×100	143×93	40	他のビットと切り合っている。袋状土壙であったらしい。
44	—	—	29	他のビットと切り合っている。未完掘。
45	170×150	140×120	115	袋状土壙であるらしい。

上表からみると、袋状を呈する土壙はP₂, P₃, P₄, P₅, P₁₄, P₁₈, P₁₇, P₂₃, P₃₀-1, P₃₁, P₃₂, P₃₄, P₃₉の13個にすぎないが、明らかに袋状土壙であったと思われるもの、調査中に土壙の切り合いが甚だしいために崩壊し、図面作成前に姿を消してしまったもの等があるので、これ等を含めて個数を示すと、それは38個になる。

概して、袋状を呈さない土壙は深度が浅いようである。だがP₈のように図面上の数値から見ると袋状土壙ではないようだが、発掘当初は袋状を示しており、これなどは深度が浅い。第1次調査報文でも触れたように、耕作土である腐植土層が浅く、その下が今市軽石層であるため、深度の浅い袋状土壙は崩壊しやすいためか、口径と底径との比に著しい差異が生じないようである。

土壙の充填土中には例外なく炭化物が混入しており、充填土が黒色でありかつかたい場合には、その混入度合いが著しいようである。今回の調査では木の実の炭化物はみられなかった。また壙内からは土器片が多量に出土する場合と少ない場合がある。第1次調査では完形に近いもの（復元されたものを含む）が多数出土したが、今回は極めて少なくP₈で2個体分出土したにすぎない。石器は他の袋状土壙群発見の遺跡と同様に、その種類、量ともに貧弱であり、石鏃、打製石斧、磨製石斧、敲石、磨石、凹石、石皿等が若干発見されたにすぎない。

ただ耳栓がP₁₄から出土し、硬玉製大珠がP₂₄から検出されたことは特記されよう。耳栓については他の袋状土壙が発見される遺跡からも出土例はあるが、硬玉製大珠が土壙内から発見された例は殆んどないといってよい。

次に土壌の付属施設であるが、土壌の口部辺には配石された特殊遺構は認められず、僅かに土壌内の底面壁に若干の河原石、礫などがあつたにすぎない。ただ土壌内の壁近くに小ピットが1個または数個設けられている例が非常に多かった。この小ピット内の土器と土壌内の土器には時間的差異はない。また小ピット内には礫が埋まっている場合があるが、これは廃棄されたものであり、特別の意味はないようである。なお、小ピットの大きさであるが、小規模のもので口径20~30cm、深さ30cm前後であり、大きなものでは口径50~60cm、深さ60cm前後のものがある。このような小ピットは土壌内に設けられるのが一般的であるが、中には土壌外にある場合がある。このことは土壌の機能を知る上に留意すべき点と思われる。

最後に若干の土壌について触れてみよう。第3図に示したP₃は典型的な袋状土壌であるが、充填土は黒色で硬く、底面には砂質土壌が認められた。だが視沢遺跡(西部須野町)の土壌内底面に敷かれた場合とは異にするので、恐らく流入されたものであろう。底面付近には炭化物の混入が著しく、石炭も出土している。また壁に近いところからは加曾利E₁式土器の口部破片が出土している。柱穴状の小ピットが東壁と南壁に近いところから発見された。東壁の小ピットは口径58×50cm、底径54×53cm、深さ63cmで比較的大きなものであり、底面直上からは土器写真7に示したもの(加曾利E₁式)が出土している。南壁の小ピットは口径43×40cm、底径35cm、深さ55cmのものである。

P₅も袋状土壌であるが(第4図)、表にも示したように口径161×128cm、底径225×178cm、深さ90cmで、この種の規模としては普通である。充填土は黒色土で硬いが、七本桜軽石、今市軽石および多量の炭化物が混入している。遺物としては土器片が多く含まれており、小さい磨製石斧も出土した。土壌の底部はやや軟かいが、多数の土器片と底部、凹石、大きな河原石などが検出された。

この土壌には付属の小ピットがある。つまり、南壁に口径43×33cm、深さ38cmのもの、東壁に口径40×31cm、底径60×51cm、深さ47cm、北壁に口径50×30cm、底径67×53cm、深さ55cmのものがある。特に東壁と北壁の小ピットは袋状を呈し、所謂柱穴状ピットとは異にしている。

第5図のP₆は、極めて浅い土壌である。口径279×237cm、底径244×203の楕円形プランで、深度は30cm程である。土壌内充填土壌は七本桜軽石、今市軽石を非常に多く混入した土質の軟い茶褐色土層である。底面にはほぼ完形に近い加曾利E₁式土器が横転して2個発見された。

このP₆土壌は所謂袋状を呈さないものであるが、他の袋状土壌と同様に付属の小ピットが数個存在する。このうち底面南、南西、西、北隅にある小ピットは、口径20~25cm、深さ40

cm程の柱穴状を呈するものであり、他の土壌とは異なったものがうかがわれる。これは星野遺跡（栃木市）発見の第2号住居として林謙作氏が発表しているものと大変似たものである。

第6図のP₁₆は、P₁₉-1、P₁₉-2、P₃₉と切り合っているものである。土壌内充填土は黒色土で七本椀軽石、今市軽石が混入し、炭化物の混入度合は多くない。また土壌底面に近い中央部には、P₃と同様に砂質土が認められたが、前述したように底面に敷いたものではないようである。砂質土壌の検出度合からみて流入されたものと思われる。この土壌は口径135×135cm、底径205×195cm、深度95cmのものであり、円形プランを呈する袋状のものである。ただこの土壌には付属の小ビットはない。

P₁₆の西側にはP₁₉-1、北西側にはP₁₉-2の2個の土壌が存在する。P₁₉-1の深度は76cm、P₁₉-2のそれは130cmを記録する。この2個の袋状土壌は切り合いがひどいため、口径、底径とも数値は不明である。P₁₉-1には口径64×52cm、底径56×52cm、深さ65cmの付属の小ビットがあり、P₁₉-2には口径42×41cm、底径39×39cm、深さ25cmの比較的浅い小ビットが付属している。P₁₉-1、P₁₉-2とも充填土色は茶褐色で、ローム土のプロットが混入し、炭化物の混入は少ない。

P₁₆土壌の南西側にはP₃₉（第6図）がある。口径170×150cm、底径215×200cm、深さ87cmの袋状を呈するものである。土壌の底面には加曾利E₁式土器片が多数散在し発見されたが、この底面はロームを張った形跡がある。所謂住居跡などにみられる張り床の手法である。この土壌には口径56×56cm、底径55×52cm、深さ55cmの柱穴状の付属ビットがある。ここから出土した土器片は土壌底面から出土したものと同時期のものである。

さて、ここでP₁₆、P₁₉-1、P₁₉-2、P₃₉の構築された新旧関係を触れてみると、調査時のセクション図からみて、P₁₉-2はP₁₉-1より古く、P₃₉はP₁₉-1より新しい。そしてP₁₆はP₁₉-2よりは新しいがP₁₉-1より古いので、結局構築の順序としては、P₁₉-2、P₁₆、P₁₉-1、P₃₉ということになる。だが出土した土器はすべて加曾利E₁式であり、土器文様からみた新旧は判別困難であるから、そこには甚だしい時間的差異はないと思われる。

次にP₁₇とP₂₃（第7図）について触れてみよう。P₁₇とP₂₃は切り合って発見された土壌である。P₁₇は口径170×150cm、底径220×215cm、深さ90cmの袋状土壌であり、口部平面は楕円形を呈するが、底部では円形プランとなる。この土壌には3個の付属ビットがある。東隅のビットは口径71×56cm、底径80×65cm、深さ65cmを示すやや袋状を呈するものであるが、南隅のものは口径48×44cm、底径37×36cm、深さ55cmの柱穴状ビットである。このビットからは上部辺に河原石、礫、土器片があり、下部からは蔽石、凹石、礫などが出土した。また西隅からは口径106×91cm、底径86×79cm、深さ25cmの比較的大きなビットが発見された。

P₁₇の充填土は黒色を呈し、底面はローム土を僅かに掘り込んだレベルにある。また充填土の黒色土層中には粘土ブロックの混入が多く、七本椀瓦石、今市瓦石、炭化物の混入物も多い。なお朱彩の土器口縁部も出土した。

このP₁₇の隣にはP₂₃がある。P₂₃の土壌は口径140×120cm、底径165×145cm、深さ60cmの袋状を呈するものであり、この土壌には口径65×56cm、底径59×54cm、深さ59cm小ピットが付属している。この小ピットの中には土器片が混入されていた。P₂₃の充填土は淡黒色を呈し、今市瓦石の混入がみられ、概して軟かい土壌である。底面上約20cm位のところからは多量の土器片が出土した。

ところで、P₁₇とP₂₃との新旧関係であるが、土壌の切り具合とか土壌内充填土などからみて、P₂₃はP₁₇より新しい構築である。ただ出土した土器片からはその新旧は判然としない。つまり両土壌とも加曾利E₁式であり、そこには著しい時間的差異はないようである。

第8図に示したP₄₂は図面上からみると袋状を示してはいないが、もとは明らかに袋状土壌として構築されたものである。口径・底径ともに155×150cmであり、深さは48cmの比較的浅いものである。これには口径75×65cm、底径82×80cm、深さ65cmの付属ピットがある。付属のピットとしては比較的大きなものであり、片側は内曲し、他の一方は直上するものである。出土した土器片からみて、加曾利E₁式期の土壌ということが出来る。

以上は若干の土壌について触れてみたが、いずれも加曾利E₁式期に構築されたものであることを付記しておこう。(場、斎藤)

(2) 住居跡

袋状土壌はA地区、B地区から発見されたが、C地区からは住居跡と思われる遺構が発見された(第9図)。調査期間やその他の事情によって完掘できなかったため、第3次調査に期待してビニールを張り埋め戻したが、ここに若干知り得た事実を記してみよう。

調査の経過にも触れたように、C地区は他の地区とは発掘方法を変えてグリット方式によって実施した。この結果、焼土のない石囲炉跡や土器の埋込みなどが発見された。ただ石囲炉跡西方約2mのところから発見された土器の埋込みのレベルは、炉跡よりかなり低いところにある。従って、炉跡と埋込み土器の間には時間的差異があることは明瞭である。また、この埋込み土器の北方約4mの地点にも石で一部囲んだ埋込み土器が発見された。

これ等の遺構(ここでは住居跡としたが)内からは、多数の土器片のほか石鏃、打製石斧、磨製石斧、礫石、磨石などの石器が出土した。この土器・石器等の出土した層位から炉跡の構築された時期と埋込み土器が設けられた時期との差異は判然としない。

今回の調査範囲から考えると、この住居跡と思われるものは、少なくとも3基位の住居跡様遺構が重複していることは歴然としている。第3次調査でこの点を追求したいと思う。

なお、石垣伊跡の遺構は60×80cmの長方形を呈するものであり、河原石10余個で組まれたものであるが、今は10個程しか残っていない。(島田・田中)

(3) その他の遺構

袋状土壌の分布範囲と住居跡の遺構を発見するために、A地区の南方に幅1.8m、長さ約41mのトレンチを設定し調査を進めた(第8図)。

この結果、P₄₀を最初に検出した。このP₄₀からは土師器がかなり多く発見され、土師式住居跡であることが明らかになった。調査日時の関係でこの住居跡の調査は完掘せずに中止した。そしてトレンチ南半部を掘り進めると、P₄₁、P₄₂、P₄₃、P₄₄、P₄₅が発見された。これは袋状土壌であるものと袋状を呈さないものとであり、前に表示したのでここでは説明を割愛したい。

従って、袋状土壌の分布範囲はA地区の南であるB地区にも及んでいることを知ったが、縄文中期の住居跡は確認することができなかった。(石山)

4. 遺物

今回の調査で発見された遺物は、主として縄文中期の加曾利E₁式土器とこれに伴う石器類である。若干ではあるが前期の繊維土器と中期初頭の阿玉台式土器、土師器、装身具としての耳栓、硬玉製大珠などが出土した。

(1) 石器類

石器には石鏃、石槍、打製石斧、磨製石斧、敲石、磨石、凹石、石皿、砥石等がある。第10図、図版4に示したものはその一部である。

これ等の石器は袋状土壌と住居跡遺構内から出土したものが大部分である。住居跡遺構とその周辺からは、石鏃3、打製石斧3、磨製石斧2、磨石8、敲石3等が出土した。

次に土壌内(土壌内付属小ビットを含む)出土の石器について表示すると次の通りである。これからみると、発見された土壌の半数近くからは石器が出土していないことが判る。

種類 土城	種類										計
	石鏃	石槍	打製 石斧	磨製 石斧	蔽石	磨石	凹石	石皿	砥石	硬玉製 大珠	
P ₂					1						1
P ₃			1	1							2
P ₄					1	1					2
P ₅				1		1	2				4
P ₆							1				1
P ₈						1					1
P ₁₀	1										1
P ₁₂	1		1		2	2					6
P ₁₃			1	1	3						5
P ₁₄			1								1
P ₁₆				1		1					2
P ₁₇				1	6	3		1			11
P ₁₉			1		1	1					3
P ₂₀									1		1
P ₂₃	1		1	1		1					4
P ₂₄										1	1
P ₃₀		1	2		1	1					5
P ₃₁				1		1					2
P ₃₆	1										1
P ₄₂			1								1
P ₄₅					1						1
計	4	1	9	7	16	13	3	1	1	1	56

この表からみると、土壌内から敲石、磨石が多く出土し、石斧類がこれに次ぐことがわかる。ただ石皿が少なかったことは奇異である。というのはこの種の土壌からは石皿が多く出土するのが一般的であるからである。また土壌別に出土数を示すと、P₁₇が最も多く、P₁₂、P₁₃、P₃₀がこれに次いでいる。しかし、全般的にみて石器の出土数は少なく、その種類もまた貧弱である。

これ等の石器の材質は、石炭、石槍の場合チャート、黒曜石が多く、敲石、磨石、凹石、打製石斧等の場合は安山岩、花崗岩、粘板岩等を使用しているようである。

第10図の1、2は石炭、3は石槍、4～9は打製石斧、10～14は磨製石斧、15は柳葉形を呈する扁平磨製石器、16は硬玉製大珠、第11図の17～19は敲石である。図版4のうち1～9、11～13は石器類である。図版4の8は第10図15であり、13は第10図16である。(島田、田中)

(2) 土器類

第2次調査によって発掘された土器は、第1次調査の出土数に比較し甚だ少なかった。第11図、第12図に示した拓影はP₁₃、C地区、C地区拡張部から出土したものである。ここに焼成、胎土混入物、色調等を表示してみよう。

拓影番号	出地点	焼成	胎土混入物	色調	備考
1	P ₁₃	普通	雲母微量、砂粒	黄褐色、口縁内側黒色	阿玉台式
2	P ₁₃	#	雲母	褐色	#
3	C地区	#	雲母微量、砂粒	赤褐色	#
4	C地区	#	雲母多量、砂粒	黄褐色	#
5	C拡張	#	#	暗褐色、内面赤褐色	#
6	C拡張	#	#	褐色、一部黒色、内面赤褐色	無文で口唇上に刻目あり
7	P ₁₃	#	雲母、砂粒	黄褐色	阿玉台式
8	C拡張	#	#	暗褐色	阿玉台式
9	P ₁₃	#	砂粒	黒褐色	加曾利E ₁ 式
10	C地区	#	雲母多量、砂粒	暗褐色	阿玉台式
11	P ₁₃	#	雲母微量、砂粒	赤褐色、内面黒色	阿玉台式
12	C地区	#	#	暗褐色、一部黄褐色	12以下は加曾利E ₁ 式
13	C地区	#	砂粒	#	隆起文の中に刺突文を施す

拓影 番号	出地 土点	焼成	胎土混入物	色 調	備 考
14	C拡張	普通	砂粒	黒色、内面暗褐色	
15	C拡張	#	雲母、砂粒	暗褐色	
16	C拡張	#	砂粒	黒色、一部赤褐色	隆線文の上に刻目文が施される
17	P ₁₃	#	#	暗褐色、内面黒色	口頸部に波状隆起文が施される
18	C地区	#	#	暗褐色、内面黄褐色	キャリバー状の口縁
19	C地区	#	雲母、砂粒	黄褐色	同上
20	C拡張	#	砂粒	黄褐色、一部黒色	口縁部に隆起した渦巻文発達
21	C拡張	#	#	赤褐色、内面暗褐色	直線と曲線の隆起線文発達
22	C地区	#	雲母微量、砂粒	黄褐色、一部黒色	22以下は加曾利E ₁ 式の新しいもの
23	C拡張	#	砂粒	黄褐色、一部暗褐色	
24	C地区	#	#	黄褐色、隆線下暗褐色	24~28、なめらかな隆起線文となる
25	C拡張	#	#	赤褐色	
26	#	#	#	黒色、口唇部と内面黄褐色	
27	#	#	#	黄褐色、一部黒色	
28	#	#	#	暗褐色、一部赤褐色	
29	#	#	雲母多量、砂粒	暗褐色	
30	#	#	雲母微量、砂粒	暗褐色、一部赤褐色	口縁部の縄文を薄く磨消する
31	#	#	砂粒	暗褐色、口唇上と内面黄褐色	
32	#	#	雲母微量、砂粒	赤褐色、内面暗褐色	口唇上に文様を施す
33	#	#	砂粒	暗褐色	
34	#	#	雲母、砂粒	黄褐色、一部暗褐色	
35	#	#	砂粒	暗褐色、一部黄褐色	縄文を地文とし、不規則に沈線あり
36	C地区	#	#	黄褐色	
37	#	#	雲母多量、砂粒	暗褐色	直線と波状沈線文が横走する
38	#	#	砂粒	黄褐色、一部黒色	21文様の退化したものであろう

1～8, 10～11は阿玉台式土器であるが, 9, 12～38は加曾利E₁式に比定されるものである。加曾利E₁式土器でも古いものと新しい方に入るものもあるようである。これらの器形の大部分はキャリバー状を呈するものと思われる。

次に主な土壌内から出土した土器(図版5, 6, 7)について表示してみよう。

写真番号	出地 土点	焼成	胎土混入物	色調	備考
1	P ₁₄ 底面	普通	雲母多量, 砂粒	暗褐色, 一部赤褐色	実測図1
2	P ₆ 底面	#	砂粒	赤褐色, 内面黑色	実測図2 内部に炭化物付着
3	P ₅ R ₄ 底面	#	雲母微量, 砂粒	黄褐色, 一部黑色	別々の土壌から出土した もの接合
4	P ₁₃	良好	砂粒	暗褐色, 一部赤褐色	
5	P ₂₃	普通	#	黑色, 内面の一部黄褐色	炭化物付着
6	C地区	#	#	暗褐色, 内面褐色	
7	P ₃ P ₂₃	良好	#	黄褐色, 一部黑色	別々の土壌から出土した もの接合
8	P ₁₂	#	雲母多量, 砂粒	赤褐色, 一部暗褐色	
9	P ₅	普通	砂粒	黄褐色, 一部赤褐色	
10	P ₃₄	#	#	赤褐色, 一部暗褐色	
11	P ₃₁	#	#	暗褐色, 一部黄褐色	
12	P ₃₉	不良	雲母, 砂粒	赤褐色	13と同一個体
13	P ₃₉	#	#	#	12と同一個体
14	P ₁₇	普通	砂粒	暗褐色, 内面黄褐色	
15	P ₃₄	#	#	黑色, 内面黄褐色	
16	P ₃₀ 底面	#	#	赤褐色, 一部黑色	17と同一把手
17	#	#	#	#	16と同一把手
18	P ₃₉	#	#	黄褐色, 一部黑色	
19	P ₃₂	不良	#	赤褐色	
20	C拡張	#	#	黑色, 一部黄褐色	埋込み土器, 実測図4
21	P ₃₉	普通	#	暗褐色, 一部赤褐色	把手
22	P ₃₉	#	雲母, 砂粒	暗褐色, 一部褐色	把手
23	P ₃ 底面	#	砂粒	黑色, 一部黄褐色	

写真 番号	出地 土点	焼成	胎土混入物	色 調	備 考
24	P ₂₃	不良	砂粒	暗褐色、一部黄褐色	
25	P ₃ P ₅	普通	#	赤褐色	別々の土壌から出土した もの接合
26	P ₆ 底面	#	#	赤褐色、一部暗褐色、内 面黒色	
27	P ₅ 底面	#	#	黄褐色、一部暗褐色	台付土器の底部
28	C拡張	#	#	黄褐色、内面下黒色	埋込み土器
29	P ₄₀	#	#	黒色、一部黄褐色	糸切底、土師期、住居内
30	P ₄₀	不良	#	黄褐色、一部暗褐色	木葉痕、土師期、住居内

P₄₀と称した土師期住居跡出土の土器(29~30)を除けば、これ等の土器はいずれも加曾利E₁式比定のものである。ここに示さなかった土器もほぼ同時期のものであるところから、梨木平遺跡における袋状土壌または袋状を示さない土壌は、この加曾利E₁式期の構築とみてよい。

なお実測図(第13図)の1は、写真1であり、2は写真2、3はP₁₀のものであり、焼成普通で胎土に砂粒を混入し、黄褐色を呈するが内面は暗褐色である。4は写真20である。また、今回は土壌内出土の土器を別の土壌内出土の土器と対比して調べたところ、接合できるものが若干みられた。

例えばP₅とP₁₄、P₃とP₂₃、P₃とP₅といったものがそれである。このことは単に土壌の同一時期を知るばかりでなく、土壌の機能を知る上からも大変興味ある事実を知った。この現象は土器片のみならず石器(凹石)にもみられた。P₃とP₅出土のものがそれである。(斎藤・石山)

(3) その他の遺物

土器以外の土製品としては、耳栓1個が出土している。図版4の14に示したものがそれである。これはP₁₄の底面から検出されたもので、色調は黄褐色、一部黒色味をおびている。砂粒を混入しているのであまり良好ではないが、滑車形を呈しており、文様は施されていない。P₁₄の土壌は口径105×86cm、底径225×221cm、深さ85cmの袋状を呈するもので、P₁₃、P₃₀₋₁と切り合っている。(瓦井、島田)

5. 総 括

(1) 袋状土壌と住居跡について

昨今、袋状土壌の調査が本県はもとより県外各地でなされ、それぞれ多くの成果をおさめている。

本県における袋状土壌、または袋状を呈さないが、同じ機能を果たしたであろう発見遺跡については、第1次調査概報で触れたので割愛するが、その後の調査報文によると竹沢謙氏の藤戸町後藤遺跡、川原由典氏の那須町門場遺跡がある。また、報文は未刊であるが市貝町浜野遺跡、鹿沼市鹿島神社裏遺跡第2次調査がある。浜野、鹿沼神社裏の両遺跡については、堀が関係しているので、従来の土壌研究の文献を整理し詳述したいと思っている。

さて、袋状土壌の初現と終末期については、第1次調査概報で触れたが、今まで発見された幾多の例から判断し、その構築された最盛期は縄文中期の前半である。つまり、阿玉台式から加曾利E₁式の時期であり、特に加曾利E₁式期がその頂点に達しているようである。梨木平遺跡の袋状土壌もこの時期に該当する。本遺跡では第1次、第2次両調査によって、81個の袋状土壌が発見された。また袋状を呈さないものを含めると90個前後に達する。今後、遺跡の全体発掘がなされるとすれば、その数は倍加されること必定である。勿論、本遺跡の場合、袋状土壌の切り合い状態からみて、同時構築ではなく、加曾利E₁式期内における新旧関係は明らかに認められるので、第3次調査後これらを整理し、構築時期差を吟味したいと思っている。

袋状土壌の新旧関係をみる場合、土器の文様、器形の差異が明瞭であれば容易であるけれども、実際はかなりの困難がある。土壌の切り合い関係がない場合は、次の操作によってある程度判断のつくものがある。それは同一個体の土器片が、二つ、三つの土壌内に包含されているか否かを調べることである。筆者たちは、土壌は貯蔵穴としての機能をもつものと考えている。この仮説に立脚し、同時開口であるならば、土器片がAという土壌とBという土壌の中に同一個体のものが含まれる可能性があるわけである。

今回の調査で次のことが判った。つまり、P₅内の土器片とP₁₄内の土器が接合された。そしてP₅内の他の土器片はP₃内の土器片と接合され、さらにP₃内の別の土器片はP₂₃内の土器片と接合した。整理するとP₅=P₁₄、P₅=P₃、P₃=P₂₃ということは、P₃、P₅、P₁₄、P₂₃が同時に開口していたということである。従って、これからは土壌相互の土器片照合という操作を通して、新旧判断をなす必要があろう。勿論、新しい土壌内に古い土壌内の土器片が埋没するという場合が時としてあるかも知れない。だが切り合い関係のない土壌間においては、土壌という特殊形態からみて、その特例は甚少ないであろう。

なお、本遺跡の土壌の中に袋状を呈さないものがあった。

この種の土壌は縄文前期にすでに存在し、後期にも存在する。前期の例としては、那須郡烏山町富士ヶ丘遺跡（語彙b式期）があり、後期の例では今市市坂の上、那須郡那須町門場、下都賀郡藤岡町後藤などの遺跡で確認されている。従って、袋状を呈さない土壌は縄文前期から中期を経て後期にわたるのである。たとえ袋状を呈さないものであっても、機能的には袋状土壌と同じとみるべきであろう。

なお、住居跡については島田、田中が本文中で触れているように、C地区で一部確認することができた。ただ若干問題を残すのは、住居跡のプランが不鮮明であることと、石囲伊内に焼土が残存しないということである。この種のものに類似したものは、芳賀町弁天池遺跡（宇大歴研調査、昭和43年）にみられる。弁天池遺跡の場合は袋状土壌群の東側に石囲炉があり、炉内にきわめて少量の焼土を残してはいたが、住居跡の全容は梨木平遺跡のものと同様に不鮮明であった。二つの遺跡に共通する点は土器の埋込みがみられることであり、中期の住居跡に屢々みられるものである。

筆者たちは県内の縄文中期遺跡を、直接、間接的にかなり調査してきた。そして梨木平遺跡を含めて言えることは、袋状土壌の数に比較して、住居跡の数が甚だ少ないか皆無といってもよい程の比率であるということである。本県の袋状土壌は貯蔵遺構であることは自明であり、もし土壌の中に墓塚的要素があったにせよ、それは貯蔵の機能を廃棄した後の利用であるから、それ程の問題はない。従って、一つの集落内に貯蔵穴群と住居跡群とが存在していなければならない。にもかかわらず、前述したような結果が一般的であるとすれば、中期遺跡の極めて広い範囲に対し、調査範囲が狭小であるという結果になるかも知れない。だが強ち調査範囲の狭小さという事由のみでは解決できないものがある。

例えば、中期遺跡の典型的なものとして、芳賀町金井台、矢板市坊山、鹿沼市鹿島神社裏、宇都宮市台耕上などの遺跡があるが、これらの遺跡はかなり広範囲に亘って発掘がなされながら、住居跡は皆無かあっても1～2基程度である。この点に本県の中期遺跡の不可解な問題がある。

勿論、住居跡を伴う遺跡もある。発掘なり露頭調査で確認できたものは、西部須野町機沢、大田原市湯坂、大田原市長者平、宇都宮市旭ヶ丘団地内、栃木市星野などの例がある。しかし、これ等の遺跡の住居跡として、袋状土壌群を考えた場合、不可解な問題をすべて解決するものではない。

このような諸問題については、いずれ県内の文献を検討し、他日稿を改め論述したいと思っている。

(2) 縄文中期土器について

第2次調査によって発見された土器は、概して、第1次調査によって得たものと大差がない。やはり土器を仔細にみると、加曾利E式の新旧二型式に細分は可能であり、梨木平遺跡の土器

は、加曾利 E₁ 式の新しいもの、つまり加曾利 E₂ 式に先行するものとして把握できるようである。前にも触れたように、本遺跡のように発土土壌が都合 81 基も確認されているので、これらが同時に構築されたわけではないので、今後は土器の細分を通して土壌構築の新旧関係を追究する一つの資料に供していこうと思う。

(3) 硬玉製大珠について

遺物の項で触れたように、P₂₄からは硬玉製大珠1個が出土している。本県の場合、硬玉製大珠は縄文中期から後期初頭にかけての遺跡から若干発見されている。これ等の分布状態をみると、比較的稠密なのは那珂川とその流域のようである。このため那珂川左岸の八溝山塊中に硬玉原石の産地を仮定する向きもある。これに対して、江坂輝彌氏は次のような見解を示している。

栃木県下での出土例は、湯津上村湯津上の有孔玉斧と大田原市長者平出土の中型・小型の繩節型大珠が古くから知られていた。渡辺龍瑞氏が昭和18年「古代文化」14巻3号誌上に馬頭町矢又岡出土の大型品を報告されて以後、最近では馬頭高校の校庭工事中、中期遺物とともに中型繩節型硬玉製大珠が3個発見された。(中略)この付近には地元の遺物蒐集家の間に未だ知らぬ資料もいくつか存在するらしいとの沢四郎氏の話もあり、大珠の分布密度が稠密になってきたため、那珂川の八溝山塊中に硬玉の原産地があるのではないかと向きもできたが、私は真直な穿孔をなし、あれだけ整形された繩節型大珠を、硬度のある硬玉で製作することは容易な業ではなく、製造地である以上、海岸地帯の貝塚に貝殻や魚骨が夥しく多いところまでゆかなくとも、かなり専門的に大珠など玉類を製作したのであろうから、そのような遺跡からはかなりの原石と玉砥石のような製造工具が出土してもよいと考える。従って硬玉製繩節型大珠の分布状態が稠密だからとの理由で、原石産地がこの付近にもあるのではないかと疑問を起すことは良いとしても、想定にまで発展するのは少し早いように思う。

確かに那珂川とその流域には比較的多く発見されているが、江坂氏が指摘するように八溝山塊中に硬玉の原石産地を想定することは早計といえよう。何故なら、近年那須郡以外の地からも発見されているからである。ここに硬玉製大珠の出土例⁽²⁾を示してみよう。

次表は江坂氏作成の表をもとにして、場がその後の発見資料を付加したものである。これからみると、縄文中期の遺跡から多く出土しているが、竹沢藤氏らが調査された後藤遺跡(藤岡町)の場合⁽³⁾は、後期所屬であることは明瞭であるが後期前半か後半であるかは明らかでないようである。一般に繩節型、緒繩型の硬玉大珠であるが、後藤遺跡の場合は勾玉型のものである点、特異なものといえる。これから推して後期後半に所屬するものなのかも知れない。

出土地	時期	型	大きさ CM	備考
大田原市羽田・長者平	中期	経節型	1 0.0	平山助右衛門氏所蔵
〃	〃	〃	3.9	〃
出土地不詳	—	〃	9.5	大田原高校所蔵
大田原市北金丸・湯坂	中期	緒締型	3.9	大田原市教委所蔵
馬頭町矢又・岡平	後期	経節型	1 4.5	渡辺龍瑞氏報告「古代文化」 1 4巻3号所収
馬頭町馬頭高校△庭	中期	〃	8.8	沢四郎氏報告「国大考古学会△ 報」4 4所収
〃	〃	〃	8.3	〃
〃	〃	—	—	現物不明
湯津上村湯津上	〃	定角式玉斧	7.3	東京国立博物館所蔵
矢板市乙畑・坊山	〃	経節型	8.0	長嶋元重氏所蔵
高根沢町石末・向原	後期	不整形器	1.5	作新学院考古学資料室所蔵
今市市長畑・坂の上	〃	緒締型	2.6	宇都宮大学考古学資料室所蔵
茂木町馬門・楡木	中・後期	〃	4.6	大坪二三男氏所蔵
藤岡町都賀・後藤	後期	勾玉型	5.0	栃木県教委所蔵
上河内村高松・梨木平	中期	緒締型	4.0	上河内村教委所蔵、第2次調査 出土

いずれにしても、梨木平遺跡出土の硬玉製大珠は極めて美麗で、玉類として珍重されたことは、以後の彌生・古墳時代と同様である。このため硬玉については多くの研究者が注目され、樋口清之氏の「日本石器時代硬玉由来伝播私考」や八幡一郎氏の「硬玉製大珠」「硬玉の礦脈」などの論文(4)ともなった。特に八幡氏は硬玉製装身具のうち、球状耳飾は縄文前期に、大珠は中期に通り得、中期以降次第に解体分割し小珠に作られるとし、これらは国内産出のものであらうと発表された。これはまさに卓見であった。

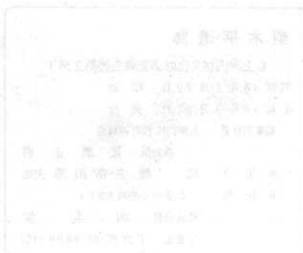
昭和15年新潟県糸魚川市の姫川流域で硬玉原石が発見されて以来、国内に産することが明らかになり、他の地域にもその産地の可能性を求める機運がおこったから、前述したように一部に八溝山塊中に求める仮説が生ずるのも当然であらう。だが、この山塊中に原石産地がないとすれば、他の地方から搬入しなければならない。ここに交易上の諸問題が内包されよう。縄文中期から後期にかけては、文化の地域的差異がかなり少なくなっている時期であり、同時に交易が頻繁になった時期でもあるので、硬玉製大珠の発見は種々な意味で重要なことといえよう。

(堀 常川)

- 註 (1) 江坂 輝彌 「所謂硬玉製大珠について」(『銅鐸』第13号, 昭和32年)
- (2) 大和久震平
堀 静夫 「栃木県の考古学」(昭和47年)
- (3) 竹沢 謙 「後藤遺跡」(『東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和47年)
- (4) 樋口 清之 「日本石器時代硬玉渡来伝播私考」(『上代文化』第8輯)
- (5) 八幡 一郎 「硬玉製大珠」(『考古学雑誌』第30巻第5号, 昭和15年)
- 八幡 一郎 「硬玉の礦脈」(『ひだびと』第9巻第6号, 昭和16年)
- 八幡 一郎 「緬甸の硬玉」(『南亞細亞学報』第1号, 昭和17年)
- この三論考は『日本の石器』(昭和23年)に収録されている。

発掘関係者名簿

発掘主体者	上河内村教育委員会
発掘担当者	作新学院高等部教諭 塙 静夫 県教育委員会指導主事 常川秀夫
調査補助員	斎藤一男・石山光雄・島田 豊・瓦井哲夫・田中善太郎(以上宇大考古学研究会員)
調者協力者	中山イサ子・中山トミ子・小寺元子・桑久保ワキ・中山トン子・古橋サト ・中山朝子・中山チイ・中山房子・渡辺マサ・漆原次枝・佐藤良子・佐藤 明子・中山ユウ(以上高松地区婦人会)
県考古学会員 村文化財 調査委員会 事務局 (村教育委員会)	長嶋元重・中村紀男・竹沢 謙・大金宜亮・橋本澄朗・川原由典 市橋伝一(委員長)・花塚庸雄・江連伝作・古橋敏雄(以上委員) 猪瀬正男(教育長)・大関義男(教育次長)・古橋喜太郎(社会教育係長) ・小林 力(社会教育係主事補)・手塚 要(教委総務係主事補)・中山 由美子(臨採)



梨木平遺跡

(上河内村文化財調査報告書第2冊)

昭和48年3月10日 印刷

昭和48年3月31日 発行

編集責任者 上河内村教育委員会

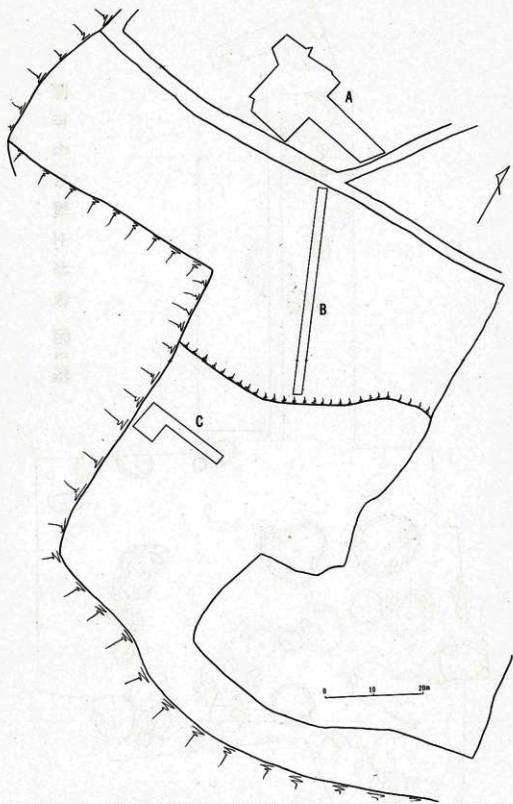
教育長 猪瀬正男

執筆者 塙 静夫・常川秀夫他

印刷所 宇都宮市小袋町597

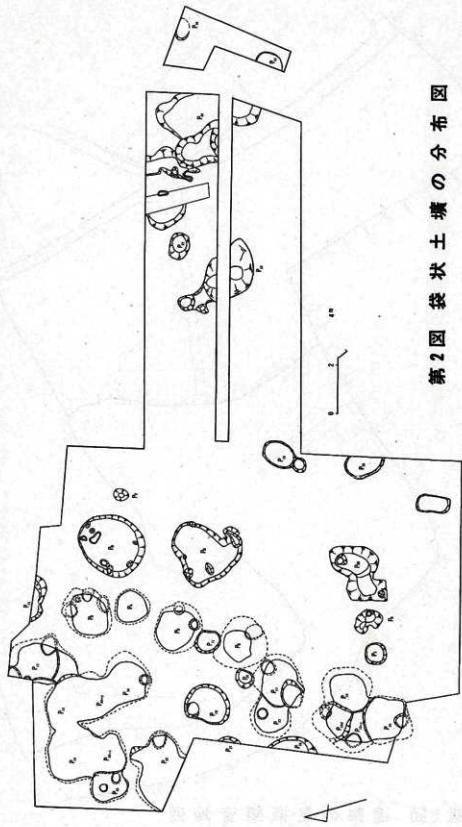
株式会社 和孔堂

TEL 宇都宮 02 0808(代)



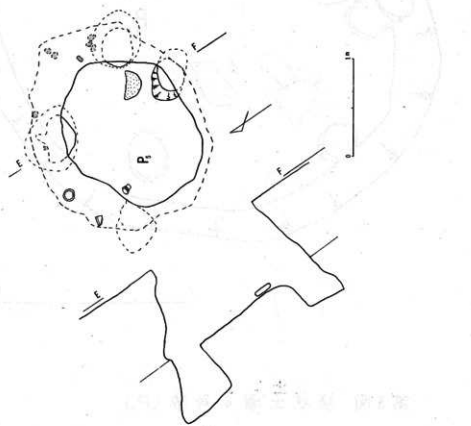
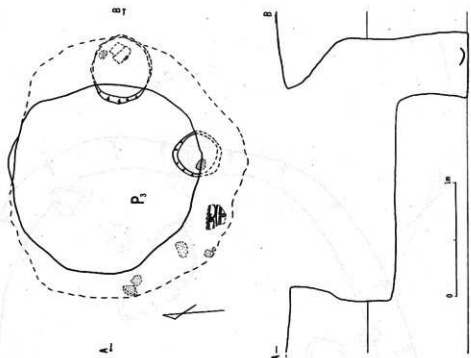
第1図 遺跡の発掘調査地区

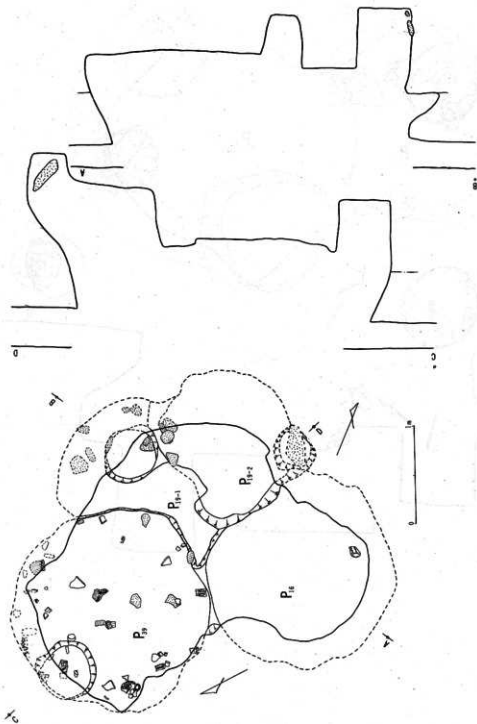
第2図 袋状土壙の分布図



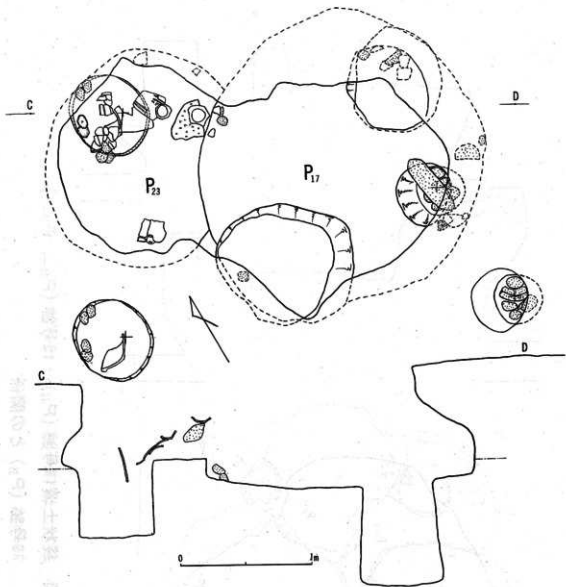
第3图 袋状土壤3号迹 (P₃)

第4图 袋状土壤5号迹 (P₅)

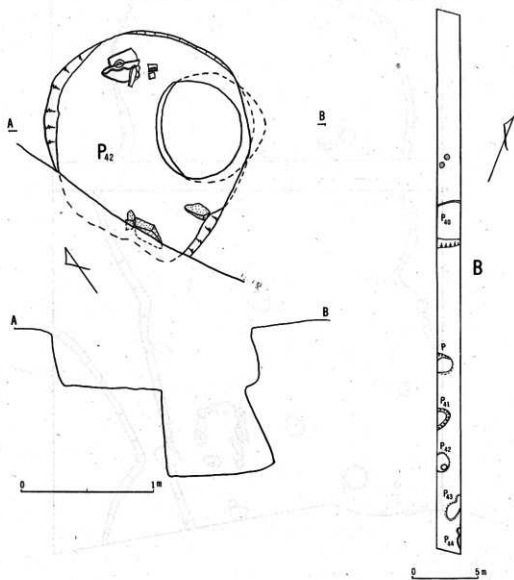




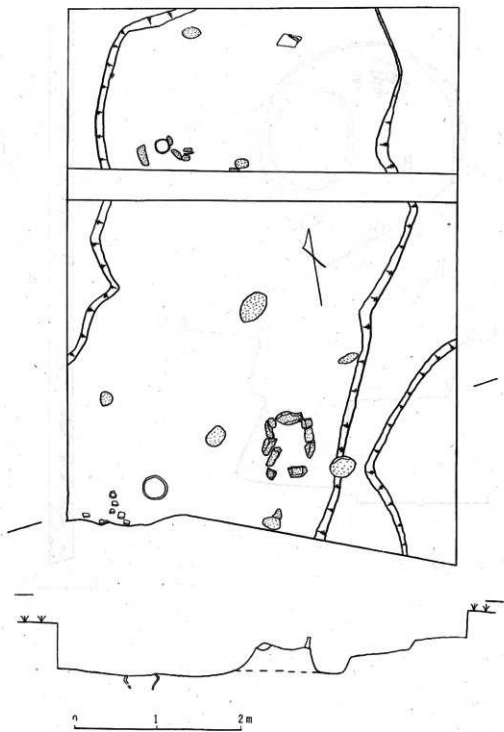
第6図 袋状土坑16号跡(P₁₆)・19号跡(P₁₉₋₁・P₁₉₋₂)
39号跡(P₃₉)との関係



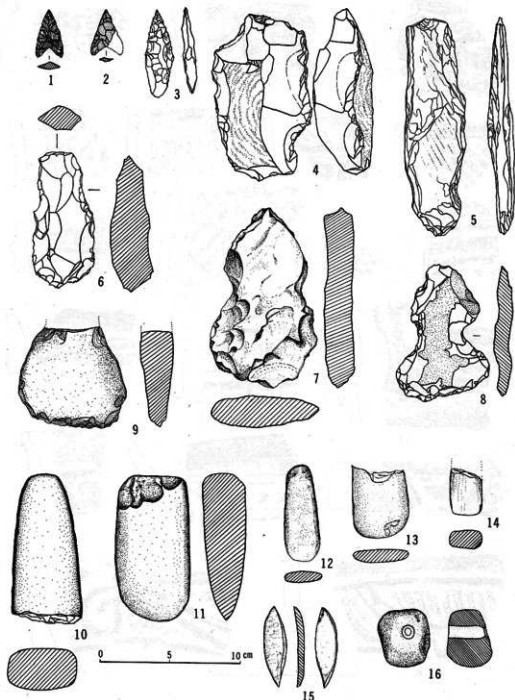
第7図 袋状土壌17号跡(P₁₇)と23号跡(P₂₃)



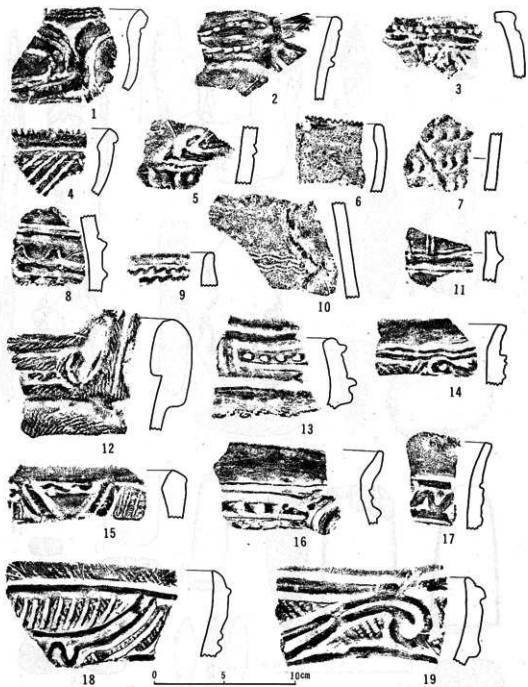
第 8 図 B地区の袋状土坑42号跡 (P_{42})



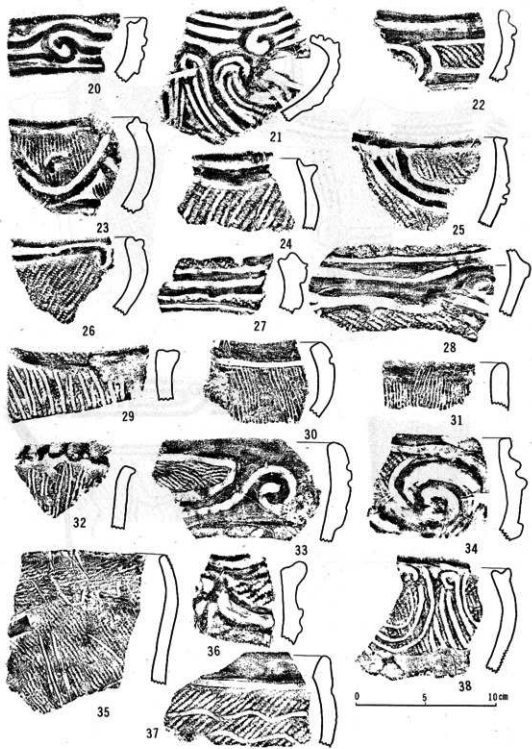
第9図 C地区の住居跡様遺構



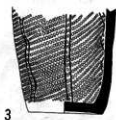
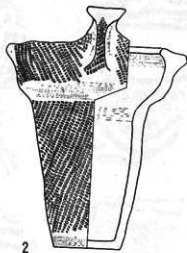
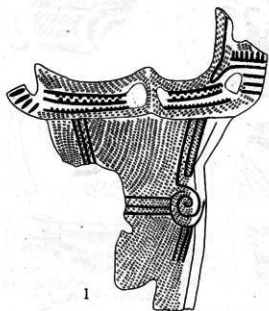
第10圖 石 器 類 (1)



第11圖 土 器 の 拓 影 (1)



第12図 土器の拓影



0 5 10 cm

第13図 土器の実測図



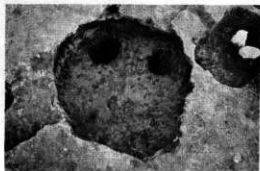
上はA地区の土坑群
右は上からP₂・P₁・P₃



P₂



P₄



P₃



P₃内出土の土器



P₆



P₁₁



P₁₃ P₁₇



P₁₁



P₁₃ · P₁₁₋₁ · P₁₁₋₂



B地区P₆



C地区・住居跡内の埋込み土器



C地区の炉跡



C地区の石囲い埋込み土器



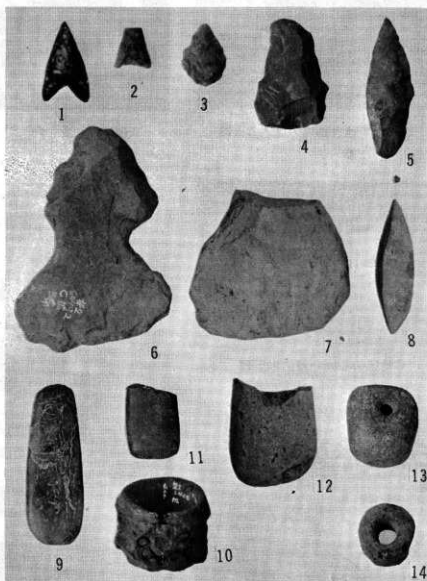
左・調査に参加した人たち



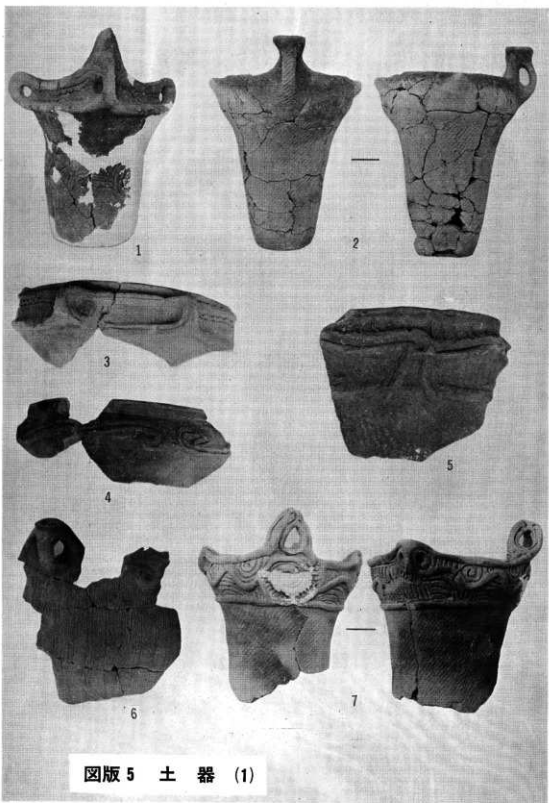
A地区の調査状況



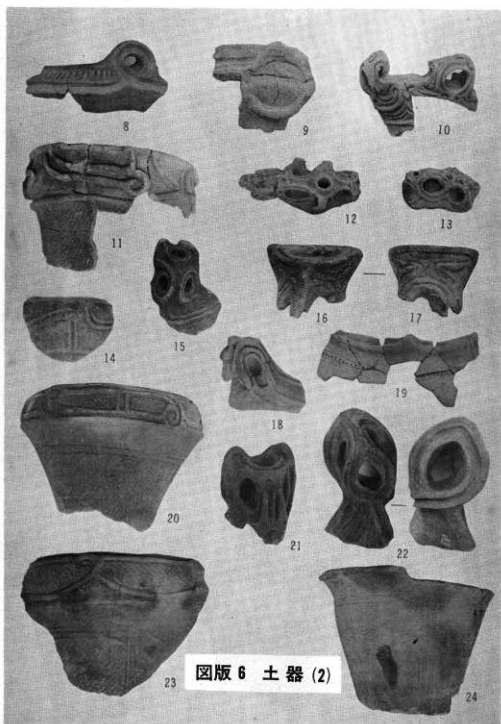
A地区東出土の硬玉製大珠

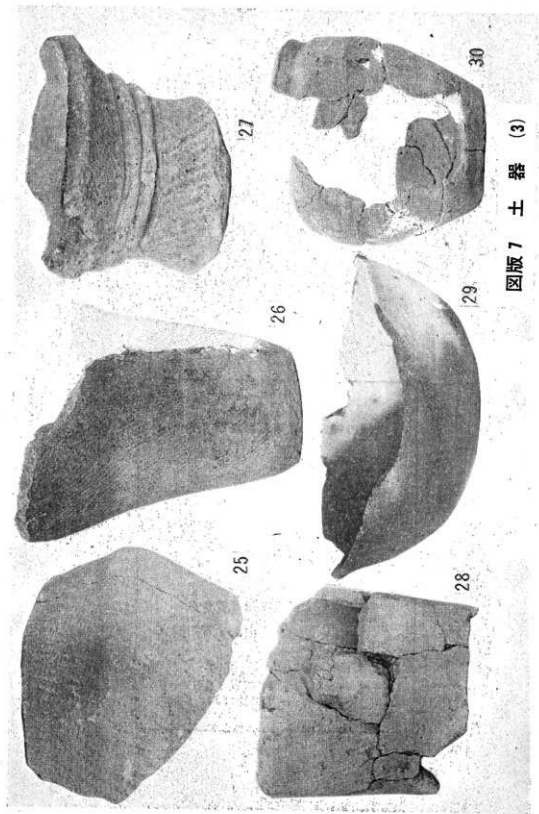


図版4 石器類(1~9・11・12)硬玉製大珠(13)
耳栓(14)土器把手(10)



图版 5 土 器 (1)





図版 7 土器 (3)